

# 廃アルミ活用で水素社会 産学官の検討会、将来構想を発表

北陸

2018/10/26 20:43

[保存](#) [共有](#) [印刷](#) [LINE](#) [COME](#) [Twitter](#) [Facebook](#) [その他](#)

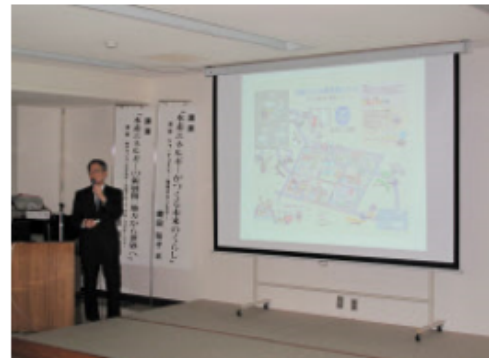
アルミを有効活用した水素社会づくりを目指す「北陸アルミ水素将来ビジョン検討会議」（座長・川口清司富山大教授）は26日、アルミから作った水素の活用構想を発表した。エネルギー循環の流れを示す概念図も示し、「水素社会に向けた普及啓発のために様々な場で役立ててほしい」としている。

「北陸からアルミ/水素/エネルギー社会の発信（発信）を」とうたったビジョンは、アルミ関連産業が集積した北陸地域の特性を生かして、エネルギーの地産地消、自立型エネルギー社会の確立などを目指すことを提言する。

概念図は、水素利用が本格化すると予想する2025年の姿を想定。地域で発生するアルミ系産業廃棄物を回収、工場でアルミを取り出して域内設備で化学反応により水素をつくり、水素ステーションや家庭の電源などとして地産地消するイメージをイラストで示した。水素発生で生じる水酸化アルミニウムの工業利用の流れも盛り込んだ。

川口座長は「廃棄されるアルミを使うことで、エネルギーの循環システムができる。また、水素の元となるアルミで運搬、貯蔵することは、安全面やコスト面でメリットがある」と強調した。

会議には、北陸3県を中心に産学官の機関、団体などが参加。8月から会合を重ね、有識者による講演や企業の水素活用の事例発表などを行うとともに、ビジョンについて検討してきた。会議はいったん終了し、今後はビジョンに沿った次の活動を考えていくという。



[画像の拡大](#)

北陸アルミ水素将来ビジョンを発表する川口座長（26日、金沢市）



[画像の拡大](#)

北陸アルミ水素将来ビジョン図

# 廃材活用エネルギー循環

## アルミ水素 将来ビジョン発表 検討会議

北陸アルミ水素将来ビジョン検討会議（座長・川口清司 富山大学院理工学研究部教



アルミ水素の利点を説明する川口教授（左奥）  
|| 石川県女性センター

授）は26日、金沢市の石川県女性センターで最終回を開き、アルミ水素の活用でエネルギーの循環システムを構築する将来ビジョンを発表した。

アルミ水素は、アルミと特殊な水溶液を化学反応させて水素を製造し、副産物の水酸化アルミも利用できる。アルミは紙パックや菓子の袋といった家庭ごみ、工場の端材などから調達する。

「北陸アルミ水素将来ビジョン」は街をモデルに挙げ、アルミ廃材を原料にエネルギーの地産地消を生む具体例を示した。地域の家庭や工場か

ら回収して水素を製造し、燃料電池やオフィスの電源、災害時の非常電源に活用する。

川口教授は、水素は貯蔵や輸送が難しい一方、アルミは北陸の基幹産業で廃材が豊富にあり、運搬の費用や安全性でもメリットが大きいことを

10/27 北日本

強調。「低コストでエネルギーや資源の大きな循環を生み出せる。実現に向け、協力してもらいたい」と話した。

トナミホールディングス（高岡市）の高田和夫専務らが水素や環境に対する自社の取り組みを発表した。

同会議は有識者や企業、自治体、各種団体が参加して8月末から計3回開き、今回で終了。今後は策定したビジョンを活用してアルミ水素を普及・啓発するとともに、次のステップを模索する。

# アルミ廃棄物の水素で発電

## 検討会議がビジョン

アルミの廃棄物から水素を発生させ、発電に使う構想を考えてきた「北陸アルミ水素将来ビジョン検討会議」は二十六日、三回目の会合を金沢市内で開き、提言をまとめた。

検討会議は八月末に発足し、この日が最終回。ビジョンでは、缶や容器など廃棄物からアルミを集め、家庭やオフィス、水素ステーションに置いた専用装置に供給して水素を発生させる方法を提案。併設した燃料電池を通じて電気を生み出すことで、水素の運搬、貯蔵が必要なく低コストで電気を生み出す。

会合では、座長の川口清司・富山大学院教授（工学）が「実現には関係企業や地域社会の理解が必要だ」と、参加した企業や団体、自治体などの約七十人に呼び掛けた。ビジョンの

実現に向けた枠組みは未定。今後は自治体や関連企業の取り組みが鍵となる。水素の活用を巡っては、国は昨年末に策定した「水素基本戦略」で二〇二〇年

度までに商業用の水素ステーションを現在より六十カ所多い百六十カ所に増やす目標を掲げている。全国にある百カ所の水素ステーションは東京、名古屋、大阪などの大都市圏に集中し、北陸三県では未設置。設置に必要な四億〜五億円の費用が課題となっている。

（阿部竹虎）

# アルミ水素活用 20年代の実現を

## 北陸ビジョン検討会議

北陸のアルミやエネルギー関連企業などによる「北陸アルミ水素将来ビジョン検討会議」の第3回会合が26日、金沢市の県女性センターで開かれた。アルミから水素を発生させ、エネルギーとして利用する社会システム構築に向けたビジョンが発表され、2020

20181027 富山新聞

年代中ごろの実現に向けて情報発信などに取り組みことを確認した。

川口清司座長（富山大学院理工学研究部教授）が発表した。アルミ製品を手掛ける企業が多い石川、富山の特性を生かし、アルミ廃材から水素を発生させる装置を使ってエネルギーに転用するビジョンが示された。

関連企業などから約80人が出席した。ジャーナリスト・環境カウンセラーの崎田裕子氏らが講演した。トナミホールディングス（高岡市）、澁谷工業（金沢市）、日華化学（福井市）がアルミ水素事業の取り組みを紹介した。

10/27 富山

# アルミから水素活用を

## 産学官会議が将来構想

アルミを有効活用した水素社会づくりを目指す「北陸アルミ水素将来ビジョン検討会議」(座長・川口清司富山大教授)は26日、アルミから作った水素の活用構想を発表した。エネルギー循環の

流れを示す概念図も示し、「水素社会に向けた普及啓発のために様々な場役立ててほしい」としている。

「北陸からアルミ/水素/エネルギー社会の発信(発進)を」とつたビジョンは、アルミ関

連産業が集積した北陸地域の特性を生かして、エネルギーの地産地消、自立型エネルギー社会の確立などを旨とする。

概念図は、水素利用が本格化すると予想する2025年の姿を想定。地

域で発生するアルミ系産業廃棄物を回収、工場でアルミを取り出して域内設備で化学反応により水素をつくり、水素ステーションや家庭の電源などとして地産地消するイメージをイラストで示した。水素発生で生じる水酸化アルミニウムの工業利用も盛り込んだ。

川口座長は「廃棄されるアルミを使うことで、エネルギーの循環システムができる。また、水素

の元となるアルミで運搬、貯蔵することは、安価なコスト面でメリットがある」と強調した。会議には、北陸3県を中心に産学官の機関、団体などが参加。8月から会合を重ね、有識者による講演や企業の水素活用の事例発表などを行うとともに、ビジョンについて検討してきた。会議はいったん終了し、今後はビジョンに沿った次の活動を考えていくという。



北陸アルミ水素将来ビジョンを発表する川口座長(26日、金沢市)